

第 44 回若手研究者・院生情報交換会 報告

研究という世界に旅立つ若手研究者の第一関門「学会誌『査読』」をクリアするには？ －投稿者レスポンスの重要性に焦点を当てて－

岡山県立大学大学院 保健福祉学研究科保健福祉科学専攻 博士後期課程 原田 武彦

2019年1月26日に同志社大学において第44回若手研究者・院生情報交換会が開催された。私自身の悩みは、学会誌への論文投稿であった。紆余曲折ありながらも、博士課程1年目を過ごしてきた。そのような凡庸な私の今後の課題は、論文を整理して査読誌に投稿することである。今回の若手研究者・院生情報交換会に参加し、投稿者が取り組んでこられたことについての報告を拝聴することで、学び得ることがあるのではないかと思ひ参加に至ったのである。

「研究という世界に旅立つ若手研究者の第一関門「学会誌『査読』」をクリアするには？－投稿者レスポンスの重要性に焦点を当てて－」というテーマに基づいた4名からの報告が行われた。まず、小野達也氏（大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授）による「学会誌の『査読』への向き合い方－若手・外国人の研究者・院生の視点も踏まえて－」の基調講演から始まり、佐草智久氏（立命館大学大学院先端総合学術研究科特別研究員）により「査読という対話を通して論文が生まれるということ－歴史研究の立場から－」というテーマで査読論文が掲載されるまでの査読者とのプロセスを通じたご自身の経験の報告があった。さらに、鄭熙聖氏（同志社大学大学院社会学研究科）から「質的研究における投稿者レスポンスの重要性と対応方法」と高橋順一氏から「量的研究における投稿者レスポンスの重要性と対応方法」が報告された。2人は質的研究と量的研究の両者の立場から査読者へ伝えるべき要点を報告され、どちらの立場においても投稿者として査読者へ伝えるべき重要点は真摯に対応することであり、査読者の意図を的確に把握することと、熱意が重要であるとのことであった。

しかしながら査読者に修正の意図を的確に伝えることは、容易ではないという内容であった。例えば、修正ひとつに関してどのように修正したかを明確に説明する必要があること、またどの程度の修正までが認められるのか等について査読者と投稿者の相互の認識が異なる場合が多々あるために、論理的に自身の論文の構成と主張を査読者に伝えなければ、自身が述べたいものと乖離してしまう場合があるということである。つまり、投稿者の研究が各分野にどのように見られているのかを意識することも肝要であるということであった。これらの報告は学ぶべきことが多く、今後の論文対策として参考になるものであろう。

今回の若手研究者・院生情報交換会は、査読論文の向き合い方に着目するものであった。報告者が経験者だからこそ、具体的な対策やレスポンスの重要性を認識することができたと思う。また、投稿者と査読者のフィールドの違いから生ずる意見の相違もあり得るものである。研究とひとことと言っても、様々な分野があるので、異なるフィールドの研究者ともコミュニケーションがとれる今回のような情報交換会に参加し、異なるフィールドの研究にどのような意義があるのか議論し、理解し合う経験を積むことも貴重であると示唆された。さらに情報交換会は、研究に関連した新しい発見があるなど良い刺激となった。また、このような情報交換会で仲間ができるということは大変こころ強い。今後の研究の糧にしていきたい。